
あほっぶる

鈴柴胡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あほっぷる

【Nコード】

N3451Z

【作者名】

鈴柴胡

【あらすじ】

なんだかよく理解できないあほな二人のカップルが日常を過ごしていくくだらない話。暇つぶし程度にでもどうぞ。

息抜きとして書いているので更新不定期です。

すべて会話文です。情景・心情描写等一切ありません。

夕食後

「お前ってさ……」

「口悪いな。女だろうがよ。」

「セクハラってやつ？」

「は！？」

「……不愉快だった。」

「ああ、そう。ワルカッタナ。んで、何だ？」

「棒読みかよ……ツマランの。まあいいや。んとね、お前ってさ、
いつつも食後寝転がるよね。どこであつてもさ。」

「んあ？まあそうだな。」

「ねえ、それって無意識？」

「いんにゃ、意識してやっってるんだよ。」

「ふーん………何で？」

「………何故？」

「何が？」

「何故聞きたいんだ？」

「……………暇だから？」

「俺に聞くなよ。つか、暇じゃねえだろうが。さっきからお前の手は食器を洗い続けている。」

「うーん……………精神的に暇なのだよ、ワトソン君。」

「何キャラだよ、ったく。それに精神的に暇って……………。」

「あれだよあれ、『精神衛生上よろしくない』ってやつと同じ同じ。」

「絶対え違うだろ。」

「……………どうせあたしは馬鹿な子さ。」

「いや、お前は阿呆の子だ。」

「……………？」

「ああ、いい。お前はそのままがジャストだ。」

「じゃすと……………ジャスト！」

「（阿呆の子ってかわいい）」

「はっ！こんな話をしたいのではないのだよ、ワトソン君！」

「……………そうかよ。」

「だからさ、なんでいつも食後寝転がるの?」

「先人の言葉を知っているか?」

「?……………ああ、『食後寝ると牛になる』ってやつ?」

「ああ。」

「それがどうしたの?」

「俺はな……………」

「『オレ』は……………」

「俺は、な……………」

「(じくじく)」

「俺は……………」

「……………殴っていい?んでもって催促していい?」

「先に催促してくれ。」

「うん、考えとく。」

「そうか、ならいい。」

「んで？」

「ああ。俺はな、小さい頃から、」

「小っちゃいころから？」

「牛になりたかったんだ。」

「へえ……………」

「ちよっ、何だよその反応の薄さ。それとその冷たい目線。やめてくれ。」

「いやだつてさ、その言葉つてようは諫めみたいなもんじゃないの？」

「それくらいわかつてる。いやな、でも、先人の言葉は馬鹿にしてはいけないもんだ。」

「は？」

「そんなことを言うくらいなの、何か訳があったと俺はふんだんだよ。」

「……………」 『夜に口笛吹くと鬼（蛇）がやってくる』？

「まあなんかあったのかもな。」

「……………」 牛になりたいの？

「ああ。」

「……………」 じゃあ別れよっか？

「……………」 お前本当に思考が突飛過ぎるよな。」

「数学得意です。」

「ドヤ顔すな。」

「うつすー！」

「んで、何で別れるって？」

「んかね、あたし、牛は無理だし。」

「牛嫌いだったか？」

「いやさ、体格的に無理じゃない？」

「……アッチの話？」

「うん。ミノタウルスは産めない。」

「ギリシア神話か。」

「いや、三步譲って、できたとしてもさ。」

「（三步なんだ）まあ神話内じゃできたらしいしな。」

「迷宮とか作れないし……」

「そこなんだ。」

「だって、大切だよ。」

「そうか。」

「うん。」

「……」

「……」

「「……………」」

「じゃあ、お前も牛になれよ。」

「うわきゃ、いきなり引つ張らないでよー。」

「いいだろ？これで万事解決だ。」

「えー？食後に寝れと？」

「ああ。気持ちいいぞ。」

「えー、でもあたしは牛より馬がいい。」

「そうか？」

「よし！」

「いきなりなんだ。いきなり立つな。」

「走ってくる。」

「は？この夜に？」

「うん。食後に走ったら馬になれるかなあって思いました。」

「お前、本当に阿呆の子だな。」

「……………じゃすと。」

「そうだな、ジャストだ。だからそのままがいい。」

「へへっ。」

「んじゃ寝てるぞ。」

「うんっ。」

「よっよっ。」

「頑張ってるー。」

「(ムジ)で阿呆の子いいなあ。」

寝る前

「あたしは鳥になりたい！」

「……………いきなりなんだ。」

「鳥になりたいんだ。」

「へー、そ。」

「……………お前なんか牛になりたいいくせに。」

「それを今ここで出すのかよ。」

「とにかく、あたしは鳥になりたいのだよ。」

「……………なぜ。」

「あのモフモフとした羽、愛らしい目玉、鋭い嘴……………素晴らしい
いじゃないか。」

「……………。」

「なにさ。」

「思ってた答えと大分違ったもんだから。」

「あたしが何と答えると？」

「いや、お前のことだから、自由に飛んで行ける、とかかと。」

「別に今でも自由にどこか行けるよ?」

「制限されているっちゃされてるだろう。」

「制限されているだろう所まで行きたいとは思わないよ。」

「そうか、既に思考からして制限されてるんだな。」

「『行けない所』ってインプットされてちゃあね。」

「『行けない所』だもんな。」

「『行けない所』だもんね。」

「……………多分そんなもんだよなあ。」

「うんうん。」

「んで、そのモフモフを手に入れるために鳥になりたいと。」

「愛らしい目玉と鋭い嘴もね。」

「せめて瞳と言えよ。目玉って……………」

「同じことだもの。」

「まあ、ねえ。」

「そう、鳥になりたいのよ。」

「そして?」

「そして? ってなにが?」

「鳥になって、どうする?」

「とりわけこうしたいとか、ああしたいとかはないよ。」

「そう。」

「お前も牛になったからなにかしたいとは言ってなかったじゃないの。」

「そうだな。」

「できるのなら、今のまま。」

「……今のまま。」

「うん。この穏やかな日々が続けばいい。」

「牛な俺と、鳥なお前で?」

「いえす。」

「いいかもな……。」

「いい感じでしょ？」

「ああ。」

「のんびりと地面で寝ているお前牛の上を、あたし鳥が飛び回って、
疲れたらお前の頭に止まって、モフモフに頭を埋めるんだ。」

「春の陽気か？」

「春の陽気だよ。」

「穏やかだな。」

「穏やかだよ。鳥は牛を食べないからね。」

「そらそつだ。牛も鳥を食わんし。」

「一緒にいられるね。」

「一緒にいられるな。」

「仲良く仲良く。草を食んだり囓ったり。」

「でもな、」

「でも？」

「今のままでも一緒にいられるぞ。」

「！」

「そうだろ？」

「……うん。そうだよ。一緒にいらねえよ。」

「牛と鳥じゃなくてもさ。」

「ずっと一緒だね。」

「むず痒いな……でもいい。」

「むふふ。」

「幸せそうだな。」

「そうだとも。あたしは今、満足していい気分なんだよ。」

「じゃあ、これでいいな。」

「うん、このままで。」

「それじゃ、」

「「おやすみ。」」

「そういえばお前。」

「ん、何？」

「この前の牛の話の時さ、」

「うん。」

「『馬になりたいって』言ってたよな。」

「……………ああ。」

「ああ、って。」

「それはまああれだよ、うん。そう。」

「……………」

「そういうことだなあ。」

「こら、自己完結で終わるな。」

「わかった、善処する。」

「んで？」

「うん。忘れてた。」

「そんなもんか。」

「うん。けど、それはあの時牛と対比すれば、ってだけで、さ。あの時はあの時なりに馬になりたかったのだよ。」

「ふーん。そういうことね。」

「でも牛と鳥の方がいいじゃない？」

「そうだな。」

「「穏やかだもんね。」」

「「……………」」

「俺達って本当に気が合うな。」

「うん。」

「そもそも、離れる必要の要素がないんだから、」

「..」

「ずっと一緒だな。」

「.....」

「おやすみ。」

「おやすみ。」

朝食製作中

「昨日仕事中に思ったんだけど……。」

「またぼんやり考え事してたのか。怒られなかったか？」

「うん、昨日はセーフ。」

「そうか、で？」

「うん。『圧倒的な美』と、『ささやかな美』ってあるよね。」

「（いきなり直に来るよな、いつも）例えば？」

「うーんとね。『ぼんきゅっぼんな美人』と『爪がピカピカな人』とか。」

「どついつ比較なんだ、それ？」

「『ぼんきゅっぼんな美人』はさ、もう見た瞬間『美』とか、『綺麗』に分類されるでしょ？」

「そうだろうな。女視点で言えばジャーズみたいなもんか？」

「人によるんじゃない？でも男は大体『ぼんきゅっぼん』が好きでしょ？」「……人によるんじゃないか？でも……否定はできないかもしれない。ん、矛盾か？」

「まあ、続けるよ。それで、『爪がピカピカな人』ってのは、一見

見た目普通な人だけど、ふと爪がピカピカに磨かれていることがわかって、こんなところにまで気を配るんだなあ、って気付く『美』」

「ふーん。じゃあ『山奥の溪谷の川の流れ』と『小川のせせらぎ』とか?」

「うん、そうだね。あとは『微分方程式』と『九九』とか。」

「……………わからない。」

「微分方程式の美しさは元はといえば掛け算、九九から始まっているんだなあ、と気付く。あ、なんか『綺麗』だ、てな感じに。」

「そもそも『微分方程式』が美しいもの、っていうことがわからん。」

「んー、美しいってどうか……………あたしの中で数学のキラキラした部分つてのがさ、『微分方程式』だったんだよねー。」

「そうか。」

「うん。なんか、『キレイなモノ』なんだ……………。」

「人によって価値観は違うもんな。」

「そうだね。」

「朝から深い話をしたな。」

「うん。理解してもらえてすっきりしたよ。」

「それはよかったんだが……………」

「なに？」

「時として、時計を見ながらの行動を家でもしてくれないか？」

「ん？」

「もう朝食を食わねば遅刻するぞ。」

「あらまあ。」

「ガス台に戻ってくれ。」

「はい。」

「…………頼むよ、ホントに。」

「朝ごはんは目玉焼き。期待してねー。」

「目玉焼きにどう期待しろよ。」

「間違った。卵焼き。」

「期待しようか！」

朝食後・出勤前

「なあ。」

「ん？」

「俺達つてさ、お互いの呼び方がそんなに過ぎやしないか？」

「そうかな？」

「俺もお前も『お前』って呼ぶだろ。」

「うん。でも伝統的じゃないの？」

「……………ああ、亭主関白な感じの親父の『お前』か。」

「だからいいんじゃない？」

「でもなあ、なんつーか、さあ。」

「なに？」

「こーう、もっと、その、アレだよ。」

「なんか歯切れ悪いね。結局何が言いたいの？」

「あー……………俺らつてまあコイビ下ってやつだろ。」

「うん、そうだよ。それは間違いない。」

「ああ。それにまだ若いだろう?」

「それが?」

「だからまだ熟年夫婦みたいな雰囲気はいらなと思うんだ。」

「そっかー。」

「『おい』とか『お前』ってのは付き合いが長すぎてもう甘さがすつかりないみたいだろ?」

「熟年夫婦に失礼だろ。」

「じゃあさ、お前の両親って今でもいちゃいちゃしたり甘い空気を醸し出したりしてるか?」

「うん。」

「……………そうだった。お前の両親の相思相愛っぷりは絶滅危惧種みたいなもんだったよ。」

「えへへ。」

「照れるな。普通そこは恥ずかしくなるもんじゃないか?」

「ぶー。だって…………。」

「ふくれるな。『ぶー』とか言いながら大の大人にされてもあまり

「かわいくない。」

「ちっ。」

「舌打ちすな。」

「うるさい。お前はあたしのマミーか。」

「違い。」

「そつだ。コイビトだ。」

「……………」

「んあ？」

「おお……………」

「なにぞ。」

「なんかお前の口から『コイビト』とか出ると新鮮だな。」

「そつ？」

「ああ。」

「ふーん……………」

「お、なんかいいな。」

「？」

「若いコイビト故の『甘さ』が漂ってきた。」

「『甘さ』？」

「ああ。俺が求めていたのはこれだ！」

「あたしらは今まで苦かったの？」

「いや、どっちかっていうと酸っぱかった。」

「なんとまあ。」

「若さとは過ぎて行くもの。だから今を謳歌しなくては損だろう？」

「そんなものなのかなあ。」

「ああ。だからまず、呼び方から心機一転して、ちつとは『甘さ』
つてのを楽しんでみないか？」

「ほーほー。でもさ、なんて呼ぶの？」

「あー……………今更名前つてのものな。」

「今更だよな。」

「光？」

「コーヘー？」

「……………」

「逆によそよそしいな。」

「ってか気持ち悪い。」

「しゅもつともだ。」

「。びびる。」

「どっすっかねっ？」

「うーん……………」

「そっだな。」

「……………」

「……………」

「……………牛。」

「牛？」

「うん。牛になりたいお前。」

「……………じゃあ、鳥になりたいお前？」

「それでいいんじゃない？」

「呼び方？」

「うん。」

「……………いいかもな。」

「でしょ？」

「お互いしかわからない呼び方。コイビトっぽい。」

「うんうん。」

「若いな。」

「若いね。」

「鳥。」

「牛。」

「くふうっ!」

「あははは!」

「いーいー!これ、いーよ!」

「もうこれでいいね。よし、携帯の電話帳の名前を『牛』に換えよう。」

「お、んじゃ俺も『鳥』に換えるかな。」

「朝から甘いものとか、胃もたれしそうだよ、牛。」

「そうだな、鳥。」

「「ッ……ク……!」」 笑いを堪えている

「はあ……。」

「よく福を呼び寄せられたね。」

「ああ。笑ったな。」

「じゃあ、」

「そうだな。仕事に行こうか。」

「忘れ物の歌うたった？」

「まあ……忘れ物はないな。」

「よう。」

「……」
「……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3451z/>

あほっぷる

2011年12月11日21時52分発行